

悪しき「改革派」が合同の流れを変えたがっている

Boze gereformeerden willen fusietij keren

ローデヴェイク・ドロス

2002年9月24日

ヘラルト・デッカー、ヘルベン・ヘイティンク共著

『共に良い道を歩んでいるのか? 「現代的教会」を弁護する』

テン・ハーヴェ、パールン、ISBN 9025953336、128ページ、14,90ユーロ。

彼らは、「共に歩む教会」(Samen op weg-kerken、以下 SoWと略)と呼ばれる教会合同に対して、ずいぶん前から腹を立てていた。彼らは「異なる思考を持つ敵同士が一つの教団になること」で、一つの「化け物連合」(monsterverbond)を生み出さざるをえないのではないかと自問してきた。ずっといらいらしてきた。そして6月に『共に良い道を歩んでいるのか?』(Samen op de goede Weg?) が書かれた。歩んでいないのではないかと彼らは言うのである。

本書が出版されねばならなくなったきっかけは、SoWのプレシール議長が『信実』(Trouw)の誌上インタビューの中で「合同において生じる厄介な問題のすべては、典型的にNHK(国教会系改革派教会)的なやり方で片付けさせてもらいたい」と語ったことに始まる。これを読んだGKN(総会派系改革派教会)のヘラルト・デッカー氏とヘルベン・ヘイティンク氏は、目が回るほど腹を立てた。彼らは昨日出版された本の中で、そのインタビューに不快感を示しつつ、別の道を示した。教会合同は、2004年1月1日には完了しなければならない。残りはずか1年半しかない。それにもかかわらず、アムステルダム自由大学の二人の教授は、その流れを変えようと試みる。冷静な調子で、しかし、間違いなく怒りをこめて。彼らの怒りの矛先は、(プレシール流の)ヒエラルキー的で非民主的な構造を持つ新しい「一つの SoW教会」を構想するスタイルの教会形態に向けられている。GKN の人々は、そこで後ずさりするであろう。彼らは、自らの現代的な(民主的でボトム・アップ型の)教会形態を持ち出すに違いない。NHK のような時代遅れのトップ・ダウン型の教会など真っ平なのだ。「そこに我々の痛みがある」。彼らは GKN的に方向づけられた教会こそ

が「現代的な教会である」と述べて、これを弁護するのである。

デッカー氏とヘイティンク氏が提供している、1986年から2002年までのSoWの歩みについての歴史的スケッチにおいて、新しい情報はほとんど提供されていない。しかし、以下の諸点についての彼らの怒りを、読者にぶつけている。

全国の〔SoWの〕宗教センターに関して：ずさんなカリキュラム、開館、運営。

牧師養成に関して：アムステルダム自由大学の死、GKNの激怒。

意思決定に関して：合同の決定に従うどれくらいの諸教会が、その帰結が何であるかを知っているだろうか、という問題。

ところが、残念なことに、『共に良い道を歩んでいるのか』は、GKNの中の多くのアブラハム・カイパー(主義者)と共に書き下ろされているので、NHKの中にいるSoW批判者 G. ディングマンス氏への差し向けになることは、おそらく避けがたい。ディングマンス氏への対抗として1989年に起こった「クーデター」を、デッカー氏とヘイティンク氏は、未だに取り消そうとしているのである。

この本における彼らの結論は、不幸な結婚をするよりも結婚しないほうがましであるということである。この結論をもって、このGKNの「左翼」たちは、NHKのうるさい右翼たちと同じ立場を取る。すなわち合同(een fusie)よりも連合体(een federatie)のほうが好ましいというのである。本質的に見て、合同は連合よりも道義的ではない。たしかに、連合体のほうが、異なる教会において増大していく対立よりもふさわしい。合同しない道も残されているのである。

デッカー氏とヘイティンク氏の怒りは、「構造のスケッチ」辺りで行き詰っている(ヘイティンク氏は最近、読む価値のある牧師論を書いた人である)。彼ら自身、この本には輝くような内容を持っているとは言いがたいことを知っている。どのみち、教会合同についてのおくびが出る論文など誰も読みはしないのだが、この本には少量の硫酸がある。教会の闘士たちは、それを利用するであろう。

(関口 康訳)